

これが海洋資源科の研究成果です

厚岸の水産業を考え 僕たちにできることは何か

道内の水産高校の生徒による『第29回北海道高等学校水産クラブ研究発表大会』が、11月5、6日の両日、情報館で開催されました。

厚岸水産高校からは、校内発表大会で選ばれた2チームが参加し、研究した内容を報告しました。

惜しくも全国大会出場への切符は逃しましたが、地域の身近な問題に着目し、半年に渡る彼らの研究成果は、地元水産業に貢献するものです。



社会に出て、自分のやっていることが他で使用されているというのを忘れずに、この経験を活かして欲しい」と顧問の石澤先生は話していました。

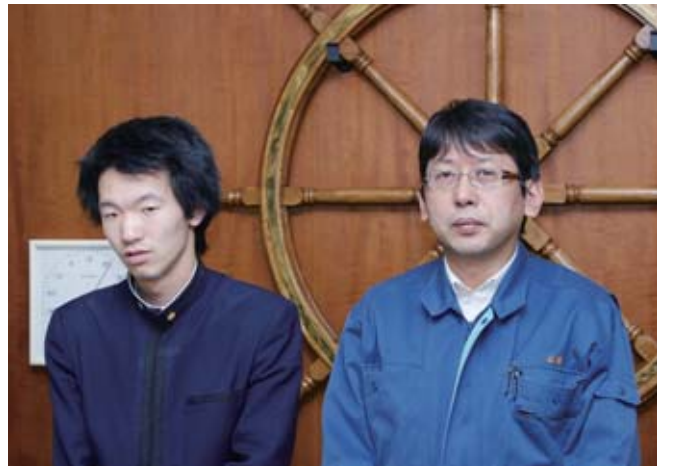
一方『地域の水産物の付加価値を高める食品開発』に挑戦した、海洋資源科3年の笹渕文之くんは「7人のメンバーで研究しましたが、なかなかテーマが決まらず、作業に入るのが遅れたため、商品化までできなかったのが残念です」と振り返ります。

このチームが取り組んだのは、地元の水産物を使った新たな加工品の開発です。サケやエビを混ぜたうどんや、蒲鉾、フィッシュバークなどを試作しましたが、どれも今一つ。そこで思いついたのが『サンマまん』。燃料高騰と価格低迷により、非常に厳しい状況にあるサンマ漁を、少しでも活気をつけたいとの思いからです。まんじゅうの生地も自分たちで練り、サンマをベースにした異なる風味の具により、5種類のサンマまんを完成させました。

「サンマの臭みが中々とれなくて苦労しましたが、まだ完璧ではありません。卒業までに完璧な製品に仕上げ、町民の皆さんにレシピを公開したい」と笹渕くん。

顧問の植井先生は「高校生らしい感覚で、地元のことを考えながら取り組んでいました。身近な問題を研究・解決する姿勢を、社会に出ても持ち続けて欲しい」とエールを送ります。

このような取り組みに対し水産高校の野呂教頭は「自分たちでテーマを決め、それを追い求めることは必要なこと。そのことが地域に還元できることはすばらしいと思



佐々木淳也くんと顧問の石澤先生

「214カ所の穴あけには苦労しましたが、今の自分たちで考えられるスベリができました」と、『和船用スベリの製作』に取り組んだ海洋資源科3年の佐々木淳也くん。彼を含む7人のチームは、普段実習で使っている和船に注目しました。斜路から完全に上架した際、船底に溜まった水の船外排出が困難だったため、近隣の船が行っている、斜路の延長線上に傾斜を付けたスベリを参考に、強度・耐久性を考え、鋼材を用いたスベリの製作に取り組みました。

「普段あまり使用することのない機械操作で苦労しましたが、鈴木造船所さんのアドバイスを得ながら完成することができました。このような共同作業の経験は将来につながります」と、佐々木くんは今後に向けた抱負を語り、「面倒くさい単純な作業が多かったがスムーズにできたと思います。



笹渕文之くんと顧問の植井先生

っています。地域の特性を活かした水産高校としての使命でもありと考えています。海洋資源科にもなっても海洋資源科は研究を続けます。ぜひ全国大会へ出場したい」と。

29回を数えた北海道高等学校水産クラブ研究発表大会。歴代の水産高校生が研究を積み重ね、試行錯誤しながら取り組んできたものです。今回『和船用スベリの製作』は努力賞を受賞しましたが、平成5年度の第14回大会では『作業用ライフジャケットの改良』というテーマで優秀賞を受賞し、全国大会の切符を手にかけています。

新しい海洋高校になっても、この取り組みは続けられることになっています。ここで研究したことが、地域の水産業の振興・発展のため少しでも寄与できるように、そしてこの経験が、生徒自らのステップアップにつながることを期待します。

地域の水産物の付加価値を高める食品開発



サンマをさばき味付け後ミンチ状に



他の具材を加え生地を包み20分蒸す



蒸しあがったサンマまんをカラッと揚げる



完成!

和船用スベリの製作



切断機によりアングルの作成



ステンレスボルト止めを行うため214カ所の穴をあける



傾斜を確認しながら全て手作業で組み立て・設置



完成!